

推しに囲まれすぎててどこを見ても尊死するアグネスデジタル

瀧音静

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ウマ娘がレースなどをせず、ごく普通に学園生活を楽しんでいたら。

そう仮定して膨らませ始めた妄想が爆発したので書きます。

口調違いや解釈違いなどあれば前者は指摘を。後者は我慢していただくかブラウザバックで。

男は意地でも出さないの（名無しで出したりはする。トレーナーは出ない）そこを了承の上お読みください。

アグネスデジタルとかいう俺らの化身と言っても過言ではないキャラがいたので基本そのキャラ視点で書きます。

目次

いっぱいちゆき 1

喫茶『黒猫堂』 5

ASMR 9

いっぱいちゆき

「今日も推しが幸せでありますように……!」

毎朝欠かさない日課のお祈り。

これをすれば、頑張っているウマ娘達みたいにあたしも頑張れる気がする。

「よし。……いぎ、戦地へ!」

玉砕の覚悟を持って一歩踏み出す。

髪を撫でる風、鼻に届く土の匂い。

——そして、

「全く、ウララさんが起きないからまたこんな時間になってしまいましたわ!」

「いつもありがとうねキングちゃん!!」

ぐげふうあつ!!

遠くから、聞こえてくるのは、推しの声。

朝一一歩目から尊さに押しつぶされそうになるが我慢。

まだ我慢よあたし。ここを乗り越えれば、桃源郷とも見紛う学園に到着出来るのだから……っ!」

「おや、デジタル君じゃないか。そんなところでうずくまってどうしたんだい?」

こ、この声は……。

ああ……神様。朝から押しウマ娘であるタキオン様に会わせていただきありがとうございます。

同室ではありますがこの尊きご尊顔やお姿を視界に入れることはあまりにも恐れ多いという理由でなるべく確認しないようにはしていましたがそうですか。

タキオン様もご登校と言う事でよろしいんですね?

「あ、え、えと。……何でもないです!!」

ただ、朝から顔を見られるというのは少々刺激が強すぎるというかですね?

朝からの過剰な尊みを補給しすぎた結果、なりふり構わずに学園を

目指したのでしたまる。

\*

私立トレセン学園。

それは、あらゆるスポーツの分野の最高峰とも言える学校だ。

あらゆる部活は基準がインターハイ出場。

一回戦負けは皆無と言っても過言ではなく、当たり前のように表彰台に乗り続けるような、そんな異常ともいえる強さのスーパーエリート校。

また、スポーツ科学や医学分野でも多数の活躍があり、トレーニング理論や器具、リハビリから薬に至るまであらゆるスポーツ関連を網羅するなど、文武両道とも言える全寮制の学園。

あたしはそこに、自分でも引くくらいの勉強を経て、無事に入学できた。

入学した動機は……。

ここの在学生みんな顔が良くて無限に推せるから！

ていうか普通に自然な形でカップリングされてたりするし、本人たちもそれを楽しんでいる節があるし、もう学園にいるだけでネタ帳が真っ黒になるほど埋まって埋まってもう色々と捗る捗る。

そんなわけで、入学して入寮し、最初にして最大の試練が……。

「アグネスタキオンだ。どうやら君と同室らしい。仲良くしてくれたまえよ」

顔が良すぎる同居人だった。

え？ マジ無理。しゆき。

しかもアグネスタキオンと名乗った目の前のお耽美な顔立ちの方は、友好の証か握手を求めてきて。

無理!! こんな綺麗な人と握手なんかしたら死ぬ!! 蒸発しゆる!!

と、おそらく相手には絶対に共感されないであろう感情を胸に渦巻かせていると。

「ふむ。いきなりなれなれしかったかもしれない。だがこうして同室になったのは事実だ。仲良く、とまではいかなくとも、ギクシヤクし

た関係にはなりたくないのね」

と、私になれなれしい動作を嫌ったと思われたらしい。

違うんですう〜(泣)。そんな綺麗なあなたと握手することが恐れ多すぎて出来ないだけなんです〜(泣)。

推しには触れない、声かけしない、邪魔をしないの三原則を貫いてるだけなんですよ〜。

と、初日はこんな感じであつたのだが。

「デジタル君」

「ひゃひゃひゃひゃい!!?」

「いい加減名前を呼ばれることくらい慣れたまえよ」

無理でしゅ。あなたの口から私の名前が呼ばれることが尊過ぎて呼吸が……。

「これからちよいと野暮用があつてね。出来れば、また代返をお願いしたいんだが——」

「承りました!!」

「恩に着るよ。今度何か埋め合わせをしましょう」

そう言つてどこかへと向かうタキオン様。

寮制と言う事で、無断外泊する生徒がいらないか、夜に寮長が見回ることになっている。

その見回りの時に、返事を代わりにしてくれないか、というのがさっきのタキオン様のお願ひ。

それくらいお安い御用だと毎回受けているけど、タキオン様はその間どこへ？

そしてそれよりも、もう結構な回数 of 代返を行つてきているのだが、果たしてその埋め合わせは何になるか——。

まさかっ!!? 壁ドン!!? ももももつと行つて耳元で囁かれたり!!!?

ダメツ!! ダメなのよあたし!! そこまで行つては推し三原則に背くことに——。

「デジタル、タキオン、居るか?」

「はい」「はい」

危ない危ない。危うく妄想が暴走して爆走し思考のコースをアウ

トして寮長の言葉に気が付かないところでした。

落ち着きましょう。素数を数えましょう。

1、2、3、5、7、11、13、17、19、23……。

ふう、少し落ち着きました。

はあ……それにしても。

こんな推しが傍にいる生活、幸せしゆぎる……。

「ただいま」

「んんんっつっつ!!?!」

唐突に耳元で囁かれたタキオン様の言葉。

それはもう、尊死するには十二分な致命的な致命傷。

さらば意識。この世に未練は……ない。

「さて、埋め合わせの件なのだがね」

「はい」

死ぬるかっ!! こんなことを口にされて!! やすやすと死ぬるか

!!

「週末、駅前の喫茶店にでも行かないかい? そこで、用事ついでにくつろごうと思っっているのだが、一緒に行かないかい?」

「行きまひゅ」

「そうか! ではそうしよう! ふふ、楽しくなりそうだなあ!!」

そのタキオン様の言葉が私の記憶の最後。

この後私は、座ったまま真っ白な灰のように燃え尽きたまま、翌日の朝を迎えるのでした。

## 喫茶『黒猫堂』

カランコロソカラン♪

「いらっしやいま……うわっ」

「客に向かつてうわっ……はないだろうカフェ？　せつかく君宛の荷物を届けてやったというのに」

マジやばたん。

タキオンさんに、今までの代返のお礼にと連れられ喫茶店へ。

何でも朝は用事があるとかで、駅にて待ち合わせしその喫茶店に行くことになったのだが、集合場所には私服姿のタキオンさんが。

もうそれだけで涎が溢れそうになる中、喫茶店へと入ってみると。

目の前にはバイト中か、ウエイトレス姿のマンハッタンカフェさんが。

最初は眩しすぎる接客スマイルをこちらに向けてくれたけど、相手がタキオン様だと分かると一変。

瞬時にジト目へと変化し、邪魔しに来たのか、と言わんばかりに声のトーンがガクンと落ちた。

でもでも、そっちの反応も十分美味しいです！

可愛らしいウエイトレス衣装なのに表情や態度はツンドラ。

その温度差が私の心へ刃となりて突き刺すように！！

呼吸を忘れる尊みをはっしているのでありまあすっ！！

「私宛の荷物？」

「以前から探していたコーヒー豆があるだろう？　それを手に入れたのだよ」

「本当ですか!!？」

ジト目から更に一変。

目を輝かせてタキオンさんに食いつくカフェさん。

目が輝いてるカフェさんもしゅきい。マジラヴやば谷園。

「こう見えても海外にいくつか知り合いがいてね。私の個人的な注文の他に頼んでみたら、どうやら見つけてくれたみたいだよ」

「これは素直にありがとうございます」



お辞儀をし、タキオンさんから荷物を受け取ったカフェさんは。

「今は他のお客様もいらつしやらないので、好きな席へどうぞ」

と、あたしたちを促して。

「タキオンさんはいつものでいいんですよ？」

「ああ、構わないよ」

「そちらの方は？」

「あ、で、……。あ、アグネスデジタルでしゅ」

「デジタルさんですね、何になさいますか？」

そ、そんな笑顔をあたしに向けないで!!

仕事用のスマイルと知っても好きになるから！ 恋しちゃうから

!!

「あ、じゃ、こ、こ、こ、コーヒーを……」

「はい。コーヒーですね。砂糖とミルクはどうしますか？」

「ブラックでお願いしまひゅ」

「かしこまりました、少々お待ちくださいね」

心拍数が爆上がりした状態でもなんとか注文が出来た。

このままでは心臓が持たないとゆつくり深呼吸をしていると……。

「君がコーヒーをブラックで飲めるとは意外だねえ」

と、あたしの顔を覗き込んでくるタキオン様がいる。

「——っ!!」

ダメッ!! ときめいちやう!!

こんなタキカフェ甘々空間に居るのに、コーヒーに砂糖やミルクな

んか入れたら糖分過多と尊み過多で死んじゃうの。

ブラックが苦くてもタキオンさんやカフェさんを見てれば甘い気

持ちになれるから平気なの！

自覚して!! 自分たちが甘い雰囲気を出してるって自覚して!!

大体カフェさんが「いつもの」としかタキオンさんの注文を言わな

かったのが悪いんですよ!!

通ってるってことじゃないですか!! 好みを把握してるってこと

じゃないですか!!

何ですかあなた方!! 尊過ぎますよ!!? 絶対付き合ってますね!!?

——はっ!? てことはあたしはカップルの間に居るお邪魔虫!?

退いた方がいいですか!? 退散した方がいいですか!!?

「お待たせしました、コーヒーと紅茶とフレンチトーストです」  
なんて悩んでいる所へ注文したものが到着。

……タキオンさんの紅茶、砂糖が溶け切らずに視認できるんですけど?

もしかしてカフェさんの精一杯の嫌がらせとか……?

「ありがとうございます」

「はあ、いい加減、その飲み方やめませんか? 人の趣味に口出しはしたくありませんが、もう少し紅茶を楽しんでもいいんじゃないですか?」

「楽しんでいるとも。それはもう十分に」

「はあ……。そうですか。ではごゆっくり」

違うみたいです。タキオンさんが普段から限界容量を超えた砂糖を入れて飲んでみるみたいです。

……体に悪そう。

それに、タキオンさんの「いつもの」に含まれていたフレンチトースト。

アイスにシロップとこちらも甘い物のオンパレード。

……ブラックにしててよかった。見てるだけで胸やけしそう。

\*

……ふう。ウェイトレス姿のカフェさんを眺めながらコーヒーを美味しくいただきまして。

糖分の塊のような食べ物と飲み物をタキオンさんが綺麗に平らげ。おかわりの砂糖融解量巨大MAXを片手に楽しんでいる時。

カランコロンと喫茶店の扉が開いた。

そこには……、

「お、遅くなりました!」

ライスシャワーさんが申し訳なさそうに小さくなりながら入ってきますまして。

「まだ時間には余裕があります。大丈夫ですよ」

ライスさんの言葉に、カフェさんがにつこりとほほ笑んで。

「き、着替えて来ます！」

とライスさんが店の奥へ。……これは、もしや。

「なんだ、新しい子が入ったのか」

「ライスシャワーさんですね。いい子ですよ」

ライスさんのウエイトレス姿……。

死んでも忘れないように網膜に焼き付けて脳のメモリーに保存しておかなければ!!

「ふうん。……なるほどなるほど」

「またよからぬことを企んでいませんか？」

「よからぬこととは失礼な、研究だよ」

「そう言っつて初対面の相手によく分からない薬を飲ませた結果、要注意人物として学園に認知されているのはどこの誰ですか全く……」

なんて会話を推し二人がしていると……。

「今日も頑張るぞー、おー！」

店の奥から、ライスさんの決意表明が聞こえてきます。

……可愛すぎない？ え？ 天使？

と、声だけで断定したところ。

「お待たせしました。えへっ」

ウエイトレス姿へと変身したライスさんのスマイルがあたしの胸を直撃。

尊さの限界を振り切ったあたしは、幸せな顔をしながら机に突っ伏したのだった。

鼻から、生暖かい液体を垂らしながら。

## ASMR

「この間渡したテールヘアークリームは大丈夫だったかい？」

「はい！ 言われていた肌のピリつきとか、痒みも発光したりもしませんでした！」

「そうか、なるほどなるほど……」

「発光ってお前……本当に大丈夫なんだろうなそのクリーム」

「何よ？ タキオンさんが信用できないって言うの？」

タキオンさんの寮室。

その空間には今、あたしとタキオンさん以外に二人のウマ娘がいる。

ダイワスカーレットさんとウオツカさんだ。

何かと張り合っている二人で、本当にどんな事でも意地になるらしい。

……ていうか目の前で言い合いをしている姿がマジ尊みのかまたり。

にやけそうになる口元を手で押さえつつあたしは、

「しよ、それでエアコンはどれくらいで直るの？」

と尋ねた。

そう、二人がこの部屋にいる理由は、彼女ら二人の部屋のエアコンが故障してしまったらしい。

エアコンなしではあまりに地獄過ぎる猛暑に、どこか避難できる場所……と探していると、タキオンさんと遭遇。

それならば直るまでの間、あたし達の部屋に居てはどうかと提案したらしい。

もちろん、同室であるあたしにも構わないか？ と確認を取ったうえで、だ。

そして、既にカップリング認定している二人が部屋に来ることを拒めるあたしがいるだろうか？

……いや、居ない。

というわけで二人を招き、タキオンさんが怪し……もとい、あまり

見かけない薬品などをスカレットさんに薦め始め、それに対して目を輝かせるスカレットさんと、怪訝な顔をしているウオツカさんという構図が出来上がった。

あたし？ あたしはそんな尊過ぎる間に入るわけもなく、傍観者に徹していた。

「夕方くらいには……って言ってもらいましたけど」

「機械の事分かんないですし、その時間で直るかどうか……」

二人は見つめ合い、寮長に言われたことを思い出しているようだが……が。

顔近いのおっ!! 見つめ合う距離、絡みつく視線、二人が同時に首を傾げる仕草!!

全部！ 全部ネタとしていただきましゅううっ!!

「気兼ねなくここに居るといいよ。……と言っても、就寝時間になれば流石に直っているだろうがね」

砂糖が溶け切らずに残っている紅茶をすすりながら、タキオンさんがそう口を開く。

それに対し二人は、ありがとうございませと綺麗にハモって頭を下げた。

んん!! だから!! そうやって息びったりな動きを!! もつとしてっ!!

「あ、そういうばなんですけど、この間頂いたリップクリームあったじゃないですか?」

「ああ、あれかい? ……あれがどうかしたのかい」

「いえ、もうすぐなくなりそうなので、もし良ければまたいただけませんか……」

「お前、貰っておいてまたねだるのか?」

「しようがないじゃない、あのリップクリーム、保湿性抜群で使い心地いいんだから! ……ていうか、この間あなたに貸したリップクリームよ? あんたも、「あ、これいいな」って鏡見ながらうっとりしてたじゃない」

ん? リップクリームを貸した? それってつまり関節キシユ?

……まだだ、まだ吐血する時間じゃない。

「あー、あのリップ……って、鏡見ながらうつつりなんてしてねー！」

「してたわよ！ プルプルの唇指で触りながら見てたでしょ!!」

「やってねー!!」

んくつ。……ごちそうさまです。

「はっは、賑やかだねえ。ただ残念ながらあのリップは今手元になくてねえ……。代わりにこんなものがあるのだが」

そう言っただキオンさんが取り出したのは、ハンドクリームのような容器に入った何か。

「これは？」

「イヤージェル、と言ってね。耳の手入れをするときに使うジェルなんだが……」

そう言っただけて見せると、中には透明なジェルがみっちり入っ

ていて。「皮脂や汚れ、角質なんかを浮かせ、分解して取り除いてくれる代物だね。……ふむ、百聞は一見に如かず、だ。デジタル君」

「ひゃい!」

「ちよつと耳を貸してくれないかい？」

「……どうぞ」

上機嫌にジェルの効能を語っていたタキオンさんから、耳を貸してくれと頼まれた。

お安い御用、と思うと同時に、何を耳打ちされるのかと思っていると。

——ペトつと。

先ほどジェルを掬ったタキオンさんの手が、私の耳へと伸びてきて。そのまま、ジェルを塗りたくっていく。

く、くすぐりたい……。ていうか、

「耳を貸してってそういう意味……」

「間違っていないだろう？ ほら、こんな風にジェルが濁ってきたら手入れが出来ているという証拠だ」

「おおー」

スカーレットさんとウオツカさんの視線が私の耳に集まる。ていうかタキオン様!? 手の動きが優しすぎます!! もっと乱暴にして貰わないと勘違いしちゃいましたっ!!

ジェルによつて滑らかに動くタキオンさんの指に合わせ、私の鼓膜に擦れる幸福な音が響き。

耳への心地よい刺激に、思わず瞼が重くなりかける。

——が、こんなところで眠ってられるか!!

勿体なさすぎる!!

「ふむ、こんなものだろう。デジタル君、少しじつとしていてくれ」

そう言つて離れるタキオンさんの指を名残惜しく感じつつ、言われたとおりに動かないように身構えて。

「使用後は拭き取るか、洗い流すといい」

耳に届いたのか、布が触れる音。

そして、丁寧にジェルが拭き取られていく音。

はああ……タオル音心地いい……。優しく拭き取られるの癖になりゆううう。

「と、こんな感じの使い方だが……デジタル君、使われた感想は？」

「ひゃい。心なしかされた耳の方がさっぱりした感じで、されているときは心地よかったです」

「だそうだ。見たところジェルを使用した方が、毛艶が良くなっているように見えるね」

そう言いながら手に付いたジェルを拭き取り、先程使用したジェルとは別の、新品のジェルをスカーレットさんへと差し出すタキオンさん。

「耳の穴に入った場合は綿棒で掻き出すといい」

「ありがとうございます!!」

それを笑顔で受け取ったスカーレットさん。すると。

「あ、電話だ。失礼します」

スカーレットさんのスマホが鳴り、通話を始めた。

「はい。はい。分かりました! ありがとうございます!! ……エア

コン、直ったそうです」

「そうかい、良かったじゃないか」

「はい！ お邪魔しました！」

「なに、私はいつでも歓迎だよ」

「あ、あたしも歓迎しましゅ」

どうやら電話の内容はエアコンの修理が終わったという報告。

通話後、立ち上がりお辞儀をする二人に、声をかけるタキオンさんとあたし。

そのまま部屋を後にしたスカーレットさんとウオツカさんだったが、

「部屋に戻ったら早速これ試すわよ！」

「先にお前が試せよな！」

という会話が聞こえてきて無事死亡。あの二人、部屋に戻ったらウマぴよいするんだ……。

絶対するんだ……。

「さて、いきなりサンプルにしてしまつて悪かったね」

「いえ、そんな……気持ちよかつたでひゅ」

「お詫びと言つては何だが、気に入ったのならもう片方の耳にもジェルを試させてもらえないだろうか？」

ひゅっ！ ま、またタキオンさんに耳を優しく撫でまわしてもらえ  
る!?

ぜひお願いしましゅううっつ!!

……その日の夜、一日ぶりに興奮しすぎてあまり寝付けなかった。